

令和5年度 牧之原認定こども園・湊認定こども園 自己評価

《評価の基本的な考え方》

■『保育所保育指針』より

保育内容等の評価——保育士等の自己評価

保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。

職員の資質向上——保育の質の向上に向けた組織的な取り組み

保育所においては、保育の内容等に関する自己評価を通じて把握した、保育の質の向上に向けた課題に組織的に対応するため、保育内容の改善や保育士等の役割分担の見直し等に取り組むとともに、それぞれの職位や職務内容等に応じて、各職員が必要な知識及び技能を身につけられるよう努めなければならない。

■『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』より

- ・園児の実態及び園児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図るものとする。
- ・幼児の実態及び園児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図るものとする。
- ・「園児の理解に基づいた評価の実施」
指導の過程を振り返りながら園児の理解を深め、園児一人一人の良さや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。

以上の考えを基に、保育に携わる職員一人一人が、こどもについての理解をより豊かなものとし、自分たちの目指す保育を実現していくことに向け、日々の保育実践の意味を考え、次のより良い実践へとつなげていくために行ったものです。

こどもに対する評価ではなく、自分自身の保育・教育（関わり、環境構成、遊び・活動等）の内容に対する自己評価です。

職員が行った自己評価を基に園全体の自己評価を以下のように行いました。

【自己評価の視点】

- 評価A・・・十分できている
- 評価B・・・おおむねできている
- 評価C・・・やや不十分
- 評価D・・・実施できていない

基本的理念と園の役割

子どもの人権に十分配慮するとともに、子ども一人一人の人格を尊重して保育を行わなければならないことを理解している。	A
保育所保育指針や教育・保育要領を理解し、全体の計画、指導計画、保育内容や保育方法を考えている。	B
認定こども園には、入園しているこどもの保育だけでなく、ひろく地域の子育て支援をする社会的な役割があることを認識し、その取り組みが十分である。	B
こどもやその家庭についての秘密を正当な理由なく漏らすことがないようにし、個人情報適切に扱っている。	A

こども理解

子どもの心の内に寄り添う姿勢を持って関わり、共感し子どもを理解しようとしている。	A
「できる・できない」といったことで子どもの姿を捉えるのではなく、それぞれの子どもの育ちゆく過程の全体を大切にしている。	A
子どもひとりひとりの家庭状況は多様であるという考えの上で、今、その子どもに何が必要かを見極め、それぞれにとって適切な支援をしている。	B
子どもの一日を通した生活を視野に入れ、保護者の気持ちに寄り添いながら家庭との連携ができています。	B
行事やその準備は、無理なく子どもの思いに即したものであり、子ども自身が楽しさを味わえるものとなっている。	B
子どもの発達に関する専門的知識を基に、保護者への相談・助言が出来ている。	B

保育計画・保育のねらい

園の保育理念・保育目標・全体的な計画などを理解し、共通理解できている。	A
指導計画は実際の子どもの姿に基づいて作成されている。	B
保育のねらいや内容は、子どもの発達や発達過程の実情に即したものになっている。	B
複数担任の場合、よく話し合ってお互いの考えを十分に理解した上で、計画を立てている。	B
遊びや活動を十分に楽しみ、子どもが充実感や満足感、達成感を味わうことができる活動や保育計画ができている。	A
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目について理解し、保育計画やねらいを立てている。	B

環境

室内・園内の衛生・清掃に心がけ、こどもが安心して快適に過ごすための環境を整えている。	A
保育室・園内の安全の管理や子どもの健康状態への配慮などは十分に行えている。	A

保育室は玩具・遊具やコーナーなど、物の配置や子どもの動線などに配慮した環境になっている。また、発達段階により計画的に見直しや工夫をしている。	B
保育の環境は、設備や遊具などの物的環境、自然や社会の事象、保育士等や子どもなどの人的環境を含んでおり、相互に関連しあって作り出されていくものであることを理解している。	B
子どもが自ら意欲的に関われるような環境を工夫し、準備している。また、心や体を動かして夢中になって遊ぶ経験ができる環境や活動の準備が来ている。	B
子どもが人とのやり取りを楽しみ、こども相互の関わりが自然と促されるような環境となっている。	B

子どもへの関わり

子どもが理解しやすい温かく丁寧な言葉遣いで話している。	A
子どもが熱中しているときは、遊びや学びの重要性を理解し、危険がない限りその活動を見守るなどの柔軟な対応ができています。	B
子どもに声をかけるときは、視線を合わせ聞こえる程度大ききで声をかけるようにしている。	B
食事、排せつ、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなどの支援は、一人一人の発達過程に合わせて行っている。	B
子どもが泣いたり、「できない・やりたくない・いやだ」といった場面において、叱ったり否定的な言葉がけをしないようにしている。また、気持ちを安心して表すことができるよう、受容ができています。	B
子どもの行為や言動に対して、表面だけでなくその前後や心の動き・背景について捉えるようにしている。	A
一人一人の子どもの生活のリズム、保育時間、家庭の状況に配慮し生活全体を見通した支援（食事・睡眠等）が出来ている。	A
特性のある子どもについて、子どもが抱える生活のしづらさや人とのかかわりの難しさなどに応じた、環境面での工夫や援助の配慮など、学ぶ姿勢を持ち担任や他職員と協力して対応している。	A

保育者の資質向上

保育者同士のコミュニケーションを大事にし、協調性をもって相互に信頼関係を築こうと努力している。	A
「同僚性」について理解している。	B
保育者自身が子どもたちの一番身近な人的環境であることを認識し、自らの子ども親や保育親を見つめなおす機会を持っている。	B
役割や業務に対して、責任をもって取り組んでいる。（提出期日・記録内容・行事準備など）	B
仕事に対するの悩みや不安など、相談することができる環境である。	A

評価まとめ

今年度は、コロナウイルス感染への対応策を講じながらも、少しずつ日常を取り戻しながら日々の保育や行事等を進めてきた。こどもたちが無理なく楽しく取り組めるように配慮しながら行うことが出来た。

職員の研修等も多く取り組みながら、より良い保育教育となるよう職員会議・園内研修も充実していた。

職員の自己評価については、個人ごとに差異があり、今回の評価を基に園全体として保育教育の質を高めるために研修などを通して引き続き取り組んでいく。

評価は一日一日の振り返り、反省が大切であり、職員が意欲的に学ぶことができる環境を整えていきたい。